
SS集

mine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SS集

【Nコード】

N9819R

【作者名】

mine

【あらすじ】

新志（SS）中心の短編（SS）集。アイデアが思いついたり、アイデアを頂いたら…気まぐれに、更新します。
7/27追記：コ哀も追加しました。

一度だけ

「―お約束通り、付き合ってもらおうわよ？明日…」

「へーへー、わーってるよ………ったく、今になって余計な約束思い出しやがって…」

帝丹高校の学園祭―園子の謀略によって劇へと駆り出される羽目になった俺達。だけど…志保が、練習時に、余計な事を思い出しやがった。

~~~~~

「演技といえば…工藤君。覚えてる？」

「え…何をだよ。」

「…あのペンションで、言っただわよね？『フサエブランドのウォレットで、手を打ってあげる』って…忘れたとは言わせないわよ。そうそう…博士からもらった財布、中の仕切りが壊れかけてて…そろそろ変えようと思ってたのよねー…」

~~~~~

「オメー、絶対忘れてると思ったのによお…あんな1年前の約束。」

愚痴る俺の横で、クスクスと笑ってる。

こんなに、表情が…豊かになって。
自然な笑顔が、増えて。

本当に…本当に…

「ちょっと？」

っ？

「さっきからジロジロと…何なのよ。一体。」

「い、いや…別に、何でも…」

「そう…」

……

「―あつた。」

「え？」

けど、言う気失くした…やめとこ。

「でも……」

ん？

「でも、本当…感謝してるわ。あなたがいなかったら…今、こうして…ここに居る事自体、叶わなかったもの……」

「バーロオ…」

ったく…いっつも、これだ…

「え…」

「そんな顔、見せんよ……そんなの、お互い様だろ？俺だって、お前がいなけりゃー間違いなく、元には戻れなかった……いや、そもそもあの時殺されてたな。薬品なんか使われずに、あつという間に……」

「工藤、君……」

「言ってんだろ？だから……相棒^{パートナー}だって。二人いないと、存在出来ねえんだよ。」

「馬鹿ね……」

「え？」

「それより……さっさと私から離れて、部屋から出て行ってくれない？寝たいんだけど……」

「はあ？」

「なんだ、こいつ。いきなり……」

「何よ…まさか、ここで寝るつもりじゃないでしょうね？」

「え、あ…いや…」

「名探偵さんが、こんな女と一緒に同棲—なんて噂が立ったら、困るのはあなたじゃ—キャツ…」

「お前だけは、別。」

バーロオ…誰が離すもんか…手放したら、どこまでも彷徨うちまう癖によ…

「ったく…はあ…これじゃあ、私がいつまで経っても…寝れないじゃない。」

「いいだろ？別に…」

そう…絶対離さない…いや、離せねえよ。お前の事は…

「あら…そう。それじゃあ…一足お先に…寝させて…」

えっ！？ま、マジ！？

どうやって…どうやって寝やがった！？さっきまであくびすらして
なかったじゃねえか……あっ…

…ったく、素直じゃねえ奴…

ま、いつか…

一度だけ―静かに、彼女の髪を…揺らした。

プレゼント

「はい、志保。お誕生日…おめでとう。」

毎年のように、私の誕生日の時にプレゼントを贈ってくれた、お姉ちゃん。

お母さんが亡くなって、ショックの私を―慰め続けてくれたのは、お姉ちゃんだった。

『はい。志保。』

『何…お姉ちゃん。』

『…ずっと、志保はお母さんの事考えてたから―忘れてたでしょう？お誕生日よ。』

『…いない。』

この時は、欲しくなかった。心遣いは凄く嬉しかったのに―何故か、断った。

お姉ちゃんの方すら見ずに―いや、見たら多分…

『……そう…残念……』

―お母さんからの、プレゼントなんだけど―

絶対に、嘘だっと思った。幼い私でも、嘘だって分かった。

だけど―私は、お姉ちゃんの方を向いてしまった。
そして、優しい目に、あっという間に私は飲み込まれた。

『開けて…いいの？』

お姉ちゃんは、何も言わなかった。

―上手く剥がせない包み紙。結構、時間が掛かった。

『あ……っ……』

全て剥がし終えたら、中から―

『バッグ……？』

はっと、お姉ちゃんの方を振り向いた。

『お母さん…今日の為に、買っておいたのよ？志保がお母さんにお

願いで、お母さんがダメって言った時に…もう、買ってあったのよ。』

毎年のように、お姉ちゃんにはプレゼントを買ったけど―これだけは、特別だった。

「―ほらよ。」

「え？」

19回目の誕生日―

「プラダのバッグ。随分前に…欲しいって言ってなかったっけ？」

信じられない記憶力。呟いただけなのに…

「…覚えてたの？」

「ああ―一字一句、お前の呟きは逃さねえよ―てか、逃したらお前いきなり何し始めるかわかんねえからな。」

ささやかな、プレゼント。

「そう…」

思い出されるのは、やっぱりあの日。

ただ…バッグを抱きしめながら、ベッドの中で泣き続けた、あの晩。

―今宵、こんな形で、蘇った。

「…馬鹿。」

「え？」

多分、私が嫌ったのだと思って、焦る工藤君。

「…馬鹿ね。あなたじゃないわよ。」
「え、え？」

「…ありがとう……っ！」

反対側を向いて、下に置きに行こうとした私を、捕まえて―奪った。

「あっ……」

「志保―誕生日、おめでとう。」

…馬鹿…

「…ありがとう…」

「本当に…おめでとう。」
何、言ってるのよ…

ただの…ただの…

―後で、長かったキスが、もう一つ思い出させてくれた。

『志保…3歳のお誕生日、おめでとう。』
『おめでとう。』

お姉ちゃんだけじゃなくて、お母さんも、お父さんも、その日だけは無理を言って、パーティーを開いてくれた事。

毎年、数字が一つずつ増える――お母さんの優しいお祝い。

貰った物は何も覚えてない。けど、色んなモノを貰った。

今、彼からも。16年ぶりに、色んなモノを貰った。
温かい……何か、幸せな……モノを。

守るべき物（前編）

儂く揺れる吐息。

「志保、志保っ！」

激しいけど、すぐにでも消えてしまいそうな—そんな少女。

「頑張れ…志保！もう少しだ！」

手術室へと運び込まれる彼女に、走りながら、ずっと声を掛け続けた。

—後は、祈るしかない。

どれだけ、弱いのだろう。

あの扉の先で—彼女は呻き声を上げて苦しんでいるのに。

—今は、自分が彼女の力になる事が出来ない。

どうやっても。

探偵という立場では、僅かな力にすらならない。

どれだけ、弱いのだろう。俺は。

『守って…くれるんでしょ？』

—守れてねえじゃねえか…！

『心配すんなよ—絶対に、守ってやつから…』

—江戸川コナン。

『俺が死ぬまで…ずっと、お前の事を守るよ。』

—工藤新一。

全然意味合いも違う。

—今は、後者として…俺は動かなくちゃいけないのに。

なのに、なのに…

動けない。

― 全く力になれない。

A P T X 4 8 6 9 の解毒剤によって、元の姿を取り戻したはいいが

… まだ、完全に元に戻れたわけじゃない。

たまに襲い掛かる副作用が、俺らを苦しめている。

― 特に、志保にとってはこれは余りにも大きな問題だった。

当たり前だが、男と女じゃ体の強さが全然違う。

同じレベルの副作用でも、志保の方が苦しむ事になるのは、必然だった。

「志保…！」

それに、俺が苦しんでいる時は、いつも志保がサポートしてくれた。

―必ず、志保が支えてくれていた。

…何やってんだろ。

俺、志保に守られてんじゃないか…

何の力にもなれてないのに、守られているのは…俺の方じゃねえか
よ…

「くそっ！」

守るべき物は、扉の向こうにあるのに―

未だに、手術室のランプは消えようとはしない。

守るべき物（後編）

― 沢山の力を貰った。

小嶋君から。

円谷君から。

吉田さんから。

博士から。

蘭さんから…

大勢の、人から。

そして、彼… 工藤君から。

『守って… くれるんでしょ？』

― 十分すぎるほどに、守ってくれた。

いいえ… 守るだけじゃない… 私という存在そのものを、変えてくれた。

「表情が豊かになったね」

―この前、蘭さんに言われたけど、不思議だった。
だって、工藤君に会う前から、周りに感情を見せないのが、私だったから。

そして、それをずっと続けていたはずだった…

でも、周りから見て「表情が豊かになった」らしい。

―彼のお陰だとしか、思えなかった。

そう

「あなたがいたから」

…お互いの事を理解して……付き合える、あなたがいたから。

—私なんかが…愛してしまう、あなたがいたから。

…死にたくない。いいえ、死ねない。

絶対に……絶対に……

—あなたにさよならも言わずに、死ぬわけにはいかない。

~~~~~

手術室のランプが、静かに消えた。

「志保……！」

医師が出て来る。

「――命に別状はありませんでした……今晚の間には熱が下がって、明日一日様子を見れば、問題なく退院できると思います。」

頭の中で描いていた、最高の医師の言葉が――新一の脳を伝っていた。

「……ありがとうございます……！」  
――そして、新一は思った。

（……謝らなくちゃ……あいつに。いつも守ってくれてる……あいつに。感謝して、謝らなくちゃ……全く守れてない俺が、あいつに……）

~~~~~

「っ……ん……」

真っ暗だ。

—けれど、研究室じゃない事は分かった。

「志保っ！」

きゃっ…

「ちよっ…」

―いきなり抱きしめてきた彼のせいで、頭の中で情報を整理するのが遅れる。

「良かった…目覚まして…志保…」

―ようやく、把握した。

「……ごめんなさい。心配かけて。」

「いや…悪いのは俺の方だ。何の……」

えっ…

「…本当に、何の力にも…なれなくて…」

…

ふふっ…

「な、何だよ…お前。笑う事…ねえだろ…」

「まったく…探偵さん？」

「――馬鹿ね…1年中、1秒たりとも私の事を考えているあなたが――まさか、私の力になってないと思う？」

「なっ…」

「本当に…何にも分かってないのね。」

今はもう夜中の3時。

そんな時間まで、灯りを消して、私の病室で―目を覚ますのを待つような、人間が…いる？

―自然と笑みが零れちゃう。

けど……それが、正しいのかもしれない。

―嬉しいから。

「苦しんでる間も―あなたの事を考えたら、生きようと思えた…生き残れた。ありがとう、新―」

—あなたには、ずっと…守られっぱなしだわ。

力の限り、私は彼を抱きしめた。

—彼が同様に抱きしめてくれた事を、感じないぐらい強く…強く。

どうしても、離したくないから。

birthday（前編）

「そうだーそろそろ、新一お兄さんの誕生日だっけ……」

吉田さんが小2になって、初めて二人で来た喫茶店でーいきなり彼女が切り出した。

「え？」

「あつ…志保お姉さんは知らないと思うんだけど、5/4はコナン君…じゃなかった。新一お兄さんの誕生日なの…何かあげようと思っで。」

ー初めて知った。

だって彼、自分の誕生日なんて言おうとしなかったもの。

「ねえ、何がいいと思う？」
そう、ねえ…

「―彼なら、何でも喜ぶと思っわ……」
「本当？」

ま、彼の事だし…

「―でも、志保お姉さんは何をあげるの？」
「え？」

「ずるいよ…だって、新一お兄さんが一番好きな物知ってるんではない？」

「え、え…」

「―私だって、知りたい…」

…知らない。

「ねえ、教えて！」

「…ごめんなさい。」

「え…」

「私も全然、分からない…のよ。」

~~~~~

—だからって、何で私は推理小説のコーナーの前に2時間も立っているのだろう。

本を手にとって、中身を見て棚に戻す…の繰り返し。

……彼が一番好きな物って………一体…

「あっ！宮野さん！」

えっ…

「どうしたの！？こんな所で………あっ！まさか…」  
へっ…

「――新一に汚染させられちゃったの！？――大変！！早く家において！  
！新一にちゃんと説教しておいてあげるから！」

はぁ…

「違うのよ…」  
「へっ…」

「5 / 4―彼の誕生日でしょう?」

すると、彼女は手をポンと叩き「あゝ」といったような顔をする。

「そっか…そういうばそうだったわね。あの推理オタク、自分の誕生日すら忘れてるから…あげるのも面倒になってたわ。」  
「そうだったの…」

「ねえ…蘭さん?」  
「え?」

―もう、なりふり構ってられない。

「―彼が、一番誕生日に欲しい物って…何だと思う？」

「うん…」  
「……」

「―私もよくわかんないな…大体、あげれば何でも喜んでたし…」  
…そうよね。

彼なら、普通に「サンキュー」って言うってお終いになりそうなもの…

「でも…推理小説ってチヨイスは悪くないと思うよ……お父さんから貰ったのは、バイオリンの他で言ったら推理小説ぐらいだ、って言うってたし……それで？どうしてそんなに迷ってるの？」  
「えっ……」

―そんなに…って、どうして…私がここにずっと居たってバレてる

の？

「ーって顔してるわね。そりゃバレバレよ。だって……奇怪な目であなたの方を皆見てるじゃない。」

あつ…

「ずっとここに居たからでしょ？」

「え、ええ…2時間ぐらい。」

「2時間！？」

ーむしろ、彼女に感心された。

「凄いわねえ…そんなに長い時間……それで？まだいい本が見つからないの？」

「ええ……困ったものよ。こんなに数が多いのに…全て、読んだ事あるみたいだから……」

ーけれど、この一言に彼女は一番引っ掛かったらしい。

「あれ……ねえ、宮野さん？まさか…新一の推理小説ガイド、全部聞いているの？」

「え？ええ、まあ……聞き流してるだー」

「ええええええええええ！？」

——ここ、本屋よ……

「あつ……ごめんなさい。でも、まさか……はあ……」

そんなに…不思議な事なのかしら。  
食事中もノンストップで話してたら、自然と耳に入っちゃうものだと思うけど…

「流石……新一一筋だと、ここまでくる物なのねえ……」

「ちよつ……そんな……」

—嬉しそうな彼女。

「―とにかく、チヨイスを変えた方がいいわね……」  
「そうだね……………それじゃ、またね。」

「ええ―また。」

―一瞬、彼女が最後…笑ったように見えたのは…気のせいかしら。

（ふふつ……………頑張つて。宮野さん…あなたなら、レモンパイ以外の  
秘策が…思いつくかもしれないわね。）

## birthday(前編)(後書き)

もう言うまでもないですが、志保が新一に渡す物はレモンパイでは御座いませ〜ん。

一体何でしょうか？短編集にも関わらず次回に続くこの後編は、5 / 4、0時に更新予定です。

新一君の誕生日まで、お楽しみにm(\_\_\_\_\_)m

ここまで言っちゃったら…もう後には引けないぞ…俺…ww

追記

少し修正加えました。

## birthday(中編)

「たっだいまー…あれ？」

―いつものように、事件の捜査から帰って来た男は、ふとテーブルの上に乗っている紙が目についた。

「ん…？」

『買い物に行っています。夕食は遅くなるので。 志保』

昼飯を食べ損ねていた男は、時計を見やると同時に、腹を鳴らした。

「…8時半。」

尚も鳴り続ける腹時計を止めるべく、冷蔵庫を開く。

「確か、チョコレートが…ん？」

ふと横を見ると、紙切れが一枚、ひらひらと宙を舞い、床へと落ちた。

―どうやら、冷蔵庫の扉に挟まっていたらしい。

「まったく…こんな所に挟むなよな…ん？」

その紙切れを、拾い上げて、文字が書かれている方を読み上げている。

「『19』…？」

—それだけが、綺麗な書体で書かれていた。

（…って事は…やはり、換字式の暗号……まさか、志保からの挑戦状？）

—静かに、探偵としての本能が、新一の中で燃え上がり始めた。

「…19番目と取るのが普通だろうな……アルファベットだとS…平仮名の並び順だと……『て』…いや、これ一枚で本当に表せる暗号か…？」

色々と、可能性を探り出してみる。

「……待てよ。」

新一は、何かを思いついたのか—暫く腕組みをした後に、部屋を出て行った。

~~~~~

軽くノックする。

「…入るぜ。志保。」

静かにドアを開く―だが。

「誰もいねえ…か。」

『1』と『9』に分けて、アルファベットに換字すれば、『a』と『i』―言つまでも無く、『AI』即ち『哀』を示す暗号だった。

そして、引つ繰り返せば『6』と『1』…『FA』…『ふあ』。
横に向けると『の』と『―』…『のいち』

『ふあのいち』…これは、『ファの位置』……ドレミの4段階目…
4段目の位置という事になる。
そして…哀の4段目の位置……灰原哀の時に、博士の家に置いてあ
った、小さな収納の4段目…そう推測した。

いや、少しデータ不足で、それしか推測出来ない。

「……」

―収納の棚に、手を掛けた。

「―まあ、大した事はねえだろな…」
静かに、開ける。

「え…」

―キーホルダー。

それも、コナンと…灰原の姿が描かれた…キーホルダー。

「……」

それを、取り出した―その時。

パン

「わっ!」

―銃声ぐらい聞きなれている新一は、一瞬殺人事件が起こったのではないかと思ってしまった。

けれど、その音の主は…クラッカー！

「……新一…また、一つ老けたのね。おめでとう。」

「…志保……」

ゆつくりと、志保は新一の持っているキーホルダーを手に取る。

「……忘れちゃ、いけないわよね。」

小さく、新一も頷いて、逆に問い返した。

「―お前が作ったのか？」

「ええ、まあ……ちょっと大変だったけど、粘土でね……小学校の工作みたいで、意外と楽しかったわよ？」

―それにしても、出来栄えはほぼ完璧だった。

「……そうか。」

ぎゅっと、新一は、志保の手の上から、キーホルダーを握り締める。

「……そうだな。忘れちゃいけないよ……これまでの、軌跡はな……」

―強く、新一は言った。

「ありがとう……志保。」

b i r t h d a y (中 編) (後 書 き)

後編有りです。今日中に更新します！

しかも、かなり甘々な話…？

birthday（後編）

「それより……」

―彼の言葉に惹き付けられて、少し頬が赤くなってるのは分かっているながら、聞いた。

「……あなた、自分の誕生日…忘れてたの？」

「…あー…すっかり。」

「はあ…」

―微塵も期待してなかったのね…

「いや…さ、数秒ぐらいわかんなかった…耳元でいきなり銃声がしたかと思えば…」

「―推理フェチ。」

…本当だったのね…

「悪かったな…自分の誕生日すら覚えてない、ドジで…」

「―いいえ、むしろ納得したわ…あなたらしくて、安心する。」

…その名の通り、推理フェチ。

「……そうか？」
「ええ。」

…そろそろ、かしら。

「……新一？」
「ん？」

…言いづらっ…

『志保！GOよ！GO！』
お姉ちゃ…ん！？

—んっ！

「ケーキ…食べる？」
「え？」

あっ…

「一応…作っただけど…要らないかしら？…そういつの…」

…言えた。

いいえ、言えちゃった…

「サンキュー………3年ぶりだな。中3の時に、母さんに作ってもらって以来だ……」

…そういえば、彼は別居してるのよね…両親と…

~~~~~

「よいしょ…っと。」

長身の志保が、何とか手を伸ばしてケーキを取った。

―二人で食べるには十分な量の、ショートケーキ。

「大きいな…」

「そうかしら？…夕食食べてきてないでしょ？」

ここで、一発新一の腹時計が鳴った。

「ああ…って！まさかこれ…」

「―ええ。夕食。」

さらりと言う志保。

―呆れたように、新一は志保を見返す。

「へーへー…食べばいいんだろ…食べば…」

でも、内心嬉しかった。志保が…作ってくれた事が。

―幸せを、強く感じた。

「頂きます…っと。」

自分の分を取り分けて、一口…

「—美味しい…」

こいつにこんな特技があったなんて—新一がそう思うほど、だった。

—逆に、志保はホツとした様子で、ようやく自分の分を取り分けた。

「…お姉ちゃんに教わったのよ…いいえ、無理矢理教えられたのね。このぐらい出来ないとお嫁に行けないぞ…なんて言われてね。」  
「ははっ…明美さんらしいな。」

また新一はすくって、口の中へと運んだ。

「……………」

ふと、変な感触が…新一の口の中に走る。

「どうしたの？」

―急に、志保は顔を強張らせた。

「まさか…あれ…ヤバか…った…？」

~~~~~

『何か隠し味を入れると、単純なショートケーキでも結構美味しいのよ…』

『例えば？』

『そうね……マーマレードとか、パイナップルとか、ヨーグルトとか…あと…』

~~~~~

―新一の口の中で、拒絶反応が発生した。

「ちょっと…大丈夫!？」

流石に志保も心配になって、椅子を立った新一に駆け寄る。

とはいっても、新一はモコモコ言っていて、何を言いたいのかわからない。

「何よ…とにかく、ここで吐かない内に、さっさとトイレへーんっ…」

密着したいお互いの中―新―によって、無理矢理にその所業は行われる。

「バーロ。…罰ゲームだ。」

―意地悪そうに笑う新一。  
…思わず、頬を赤らめる志保。

「……あなたの好み、把握してなかったから。」

口の中に残る干し葡萄の仄かな香りを感じながら、少しだけ、笑い合った。

「誕生日、おめでとう…新一。」

**b i r t h d a y (後編) (後書き)**

間に合った！良かった！

コナン君、新一君…お誕生日おめでとぅー！

短編でコナン君の話も書いてあげようかな…

## お土産

「まだ迷ってるの？」

「まあ…ね。」

「ここできか買えない物やったら、何でもええんとちゃうの？」

「ま、旦那の趣味は癖あるからねえ…」

― 持って帰る土産が未だに決まらない。

突然誘われた、長野で二泊三日の温泉旅行：大阪の色黒探偵と、新  
一は用事で行けなくなったから、結局は女子4人の旅になった。

蘭さんは新出先生に、遠山さんは色黒探偵に、鈴木さんは京極さん  
にそれぞれ、お土産を選んだ。

― どれも、しっくりくるチョイスだと思う。

…けれど、私だけがまだ見つかっていなかった。

「宮野さん…まだ迷ってるんやね。」

「正直、一番最初にすっぱり決めちゃうんじゃないかと思ってたん  
だけど…」

「意外と優柔不断な所あるのね…」

…聞こえてるわよ？あなた達…

「そやな…ちよつと可愛い。」

へっ…

「そうだよな…哀ちゃんの場合は、最初は私嫌われてるんじゃないかって思ったけど…でも、コナン君と違う意味で、凄く可愛いと思った…今はどっちかと言うと綺麗な感じだけだね。」

…まさか…

「…でも、そろそろ出発時間よね？」

「後…30分ぐらいやで。」

「もうそろそろ選び終わるよ…宮野さん、そういう所凄くしっかりしてるし…」

えっ！？30分前！？

…全然気付かなかった。

どうすればいいのかしら。全く見当付かない…

…でも、新一…電話して、何がいいか聞くのも…何だか、それじゃあつまらないし…

あー…でも、やっぱり聞くしか……きゃっ—

「ロン、ロン…」

落としちゃった…

「あつ、すいませ………?」

…何よこれ…

……

…でも、いいかも。

……

「すいません、これ下さい。」  
「何て言つかしら……新」。

少し……びくりしてくねると思はれど……

~~~~~

「ただいま…」

「おっ、お帰り志保…どうだった？」

ゆつくりと、荷物を降ろす。

「ええ…楽しかったわ。」

「―で？」

―新一が、せがむように志保の方向を見た。

「はいはい…分かってるわよ。ちゃんと買って来てあるから、心配しないで…」

バッグの開け口を開き、志保は小さな袋を取り出した。

「…はい。これ…」

「おっ、サンキュー…開けていいか？」

だが、志保は黙ったままだ。

「…志保？」

「悪いけど……私、もう寝るわ……眠くて、眠くて……お風呂行つて来るわね。」

曖昧な返事を、新一は返す。

「あ、ああ……」

志保の態度に、やや疑問を覚えながらも、新一はお土産の方へと視線を移した。

「ま……後で、礼言つといてやるか……中身がレーズン以外なら。」

そして、包み紙を……剥がす。

―翌日、新一は一日寝込んだという。
クスクスと笑いながら看病する志保…

そして、寝込む新一の横には…ちゃんと、土産物の「湖の魚の目玉
の詰め合わせ（注・実物ではありません）」の瓶が置かれていた。
―最初見た時以上に、夢の中にそれが出てきてしまったのが、新一
が寝込んだ原因と見られている。

「レーズンじゃなけりゃ…いいってもんじゃねえだろが…」

―彼の一言は、志保に「はいはい。今度から気をつけるわ…」で、
流された。

「…そういえば、この前…近くで凄く魚嫌いな、あなた似の人がいたわ…今度見せてこようかしら。」
「やめとけよ…」

相変わらず、クスクスと笑っている志保。

可愛いーそうとしか言いようが無かった。
ーいつもはクールな彼女だから、笑顔が一層際立つのかもしれない。
…それを抜いても、とにかく可愛かった。

けれど、新一はもう一つ言う。

『悪戯は限度を持って貰いたい』
ー志保が、暫くの間小悪魔に見えた。

お土産（後書き）

……目玉は実物ではありませんm（――）m
大事な事なので2回言いました。

容疑者・宮野志保（事件編0）（前書き）

三二長編。

容疑者・宮野志保（事件編0）

「……それじゃあー工藤君……」

「ええ……考えられないんですよ。彼女にしか……」

張り詰めた空気。

「嘘……でしょ！？新一！」

「……」

「まさか……宮野さんがそんな事するはずないじゃない……！」

黙り籠る青年。

「あんた、それ本気で言ってるの！？」

「嘘って言ってよ……！」

悲痛な少女達の叫び声。

「――これが真実だ。蘭、園子……犯人は――」

犯人を名指しする時の鋭い眼光。

「……志保。お前だ。」

~~~~~

「また呼び出し？」

夕食の片づけを終えた志保が、玄関で靴を履く新一の隣で立っている。

「しゃーねーだろ……目暮警部、また助けてくれって……」

「……相変わらずなのね。」

志保が、呆れたように笑う。

「ごめんな……今日も、ゆっくり出来なくて。」

「構わないわよ——新一らしくていいじゃない……ゆっくりするのは、また週末で構わないから……」

二人は、軽く口付けをする。

「悪い……それじゃ、行つて来る。」

新一はドアを開いた。

——少し風が冷たい。

「ええ、いつてらっしやい……」

扉が閉まると、一人になってしまった志保は、小さく溜息をついた。  
（一人…つてのも困るのよね…雑誌読むぐらいしかやる事ないし…  
…そうね。今日は早く寝ようかしら…）

現在、7時。早く寝るといっても、流石に風呂を沸かすのは早い…  
そんな事を考えていて、ふと志保は思いついた。

（そういえば…近くに、新しく喫茶店が出来たって、吉田さん言っ  
てたっけ…ちょっと行ってみようかしら。）

志保は、小さなお気に入りのバッグを身につけて、家を出た。

~~~~~

カランカラン…

―新しく出来た割には、評判が良いだけあって、中々綺麗で、落ち着いた雰囲気の店内。

どちらかといえば、いつもは帝丹高校、大学の学生が良く来る場所で、平日は昼夜問わず学生が多い。

だが、この日は幸運にも空席が多かった。

「いらっしやいませ…お一人様でしょうか？」

「ええ。」

店員が、ちよつと控えめな声で案内する。

「こちらへどうぞ…」

―丁度その時だった。

「あれっ！？宮野さん！？」

いきなり、奥の方から聞こえてくる声。

「あっ…蘭さん。」

探偵事務所を開いた新一と、助手の志保とは違い、帝丹大学に通う蘭。

「—こっち来なよ！園子もいるし…」

「あ、えっと…」

志保が、少し混乱した様子で店員の方を見る。

「—構いませんよ。それでも…」

「あっ…ありがとうございます。」

一言礼を言っ、志保はゆっくりと蘭の方向へと歩いていく。

—その時、僅かな舌打ちが…店内に響いた事に、気付く者はいなかった。

容疑者・宮野志保（事件編1）

―あれこれ、1時間は経つだろうか。

長々と、最近の事について語り合った。

―蘭さんが、空手の全国大会でベスト4まで残ったとか。

―鈴木さんが、真さんと一緒に居れる時間が出来たとか。

二人は、どちらも教員の資格を取るのを目指しているんだとか。

「宮野さんは、新一と上手く行ってるの？」って聞かれたから、私は軽く「ぼちぼちね」と返す。

…素直じゃないって鈴木さんに、見られてたが、事実だからどうしようもない。

そんな、他愛も無い話だけで、時間という物はどんどん過ぎ去っていく。

「あつ…もうこんな時間。園子、そろそろ京極さんの試合の時間じゃない？」

「大丈夫よ…ワンセグあるから。あの試合、地上波で放送するみたいだし…」

—その時だった。

『プーン』

不自然な音と共に、灯りが消灯させられた。

「ちよっ…何!？」

「落ち着いて、鈴木さん…ただの停電よ。」

「そうだよ…取り敢えず、戻るの待とう?」

『ポタッ…』

…水滴?

「…何の音?今の…」

「さあ…」

「飲み物が零れたんじゃないかしら…下の床に反響して—」

パンッ

「えっ…銃声!？」

鈴木さんが反応したが―多分、違う。誰も悲鳴を上げないし…音が
違いすぎる。

「ちょっ…きゃっ―」

『ボンッ!』

はっと、私は後ろを振り返る。

―厨房の方から、煙が発生していた。

『早く!消火しないと!』

『消火器は……あった。これが…』

―すぐに、火は消えた。

「良かった……爆発が起こったかと思っちゃった……」

「いいえ……多分、爆発よ。小さかったから……大した事にはならなかったけど……」

―それより、何だったのかしら……あの何かが破裂したような、変な音……

「あつ……」

「灯り戻ったね。」

いきなり明るくなると……見えづらいわね。
「そつみた……っ!？」

―入り口付近で、私の視線は止まった。

遅れて、蘭さん、鈴木さんも……その他の数名の客も、そして店員達

もその方向を見やった。

「「キヤアアッ！」」

―彼女達の悲鳴が、喫茶店内を覆った。

そこには…一人の青年が、横たわって…朱色の液体を放出している姿。

―あまりにも無残な、死体。

容疑者・宮野志保（事件編2）

「いや、助かったよ工藤君！」

―一体、目暮はこの台詞を何回言えば済むのだろうか？

「いえいえ……まだまだ、未熟ですから……」

「―そんな事無いと思うわよ……はい、コーヒー。」

佐藤が、アイスコーヒーを新一に手渡す。

「ありがとうございます……」

「しかし……最近になって、君は静かになったな……相変わらず素早く解決するんだが……いつ頃からだったか……そう、君がいきなり行方不明になった時ぐらいか。」

「何かあったの？」

佐藤の軽い口調の疑問にも、ちよつと新一は言葉を詰めた。

「……ま、まあ……」

けれど、落ち着いて考えてみれば―彼女の影響による所が大きい。

「……少し、色々考えたんですよ……探偵の本質というのか、何と言うのか……良く分からないんですが、そう……父さんにあつて、僕に無い物……あつ――」

―目の前の少年の考えている事の次元の高さに、思わず目暮と佐藤は目が点になった。

「すいません……今の事は忘れてください。」

「あ、ああ……取り敢えず、事情聴取だ……工藤君は、ついてくるか

ね？」

「あ、僕は…ちょっと、これから用事があるので…」

『~~~~』

― 目暮の携帯だ。

「む…（ピッ）はい、目暮…」

『― 丁度良かった…まだ戻り道ではないな？』

― 松本管理官だった。

「は、はい…どうかしたんですか？」

『付近で殺しだ……』

「！」

『場所は…米花町、8丁目12番地……』『シルフ』という喫茶店だ…すぐに分かるだろう。事情聴取は高木にでも任せておけ…それじゃあ、頼んだぞ。』

「どうかしたんですか？目暮警部？」

追って、佐藤も尋ねる。

「ああ……工藤君、もう少し付き合ってくれるかね？」

「え、ええ…構いませんが…」

そして、事情を二人に説明した。

~~~~~

「亡くなったのは…宮田竜平さん、22歳…その人達と、同じ大学の人よ。」

佐藤は、その方向にいる女性二人と、男性一人を指差した。

「…いきなり停電が起こって、その影響で厨房で小爆発が起こったみたいで…それに気を取られてる間に、殺害されたと見て…間違いないわね。」

「それより…佐藤刑事。」

新一は、何かを気になっていたのか、佐藤に聞く。

「彼ら、どの—」

「帝丹大学。」

「え……」

―声のした方向を、新一ははっと振り向いた。

「蘭さんと、鈴木さんの知り合いの先輩よ……」

―蘭、園子……そして。

「志保！？お前、どうして……」

「あら……暇だったからよ。寝るにも早いし……悪い？」

「いや……別に。」

あっさりと、新一は引き下がった。

「それより……知り合いつて、本当か？蘭、園子……」

「う、うん……」

「そう、だよ……」

―二人とも、やや元気が無い。  
先輩と、相当仲が良いようだ。

「さてと……こっちの3人はひとまず置いておき……あなた達は、この人と……どんな関係か、話して頂けませんか？」

「…私は、高山由比…竜平君と、同じサークルに入ってます…」  
少し小柄な女性が、小さな声で言った。

「―私は、竜平の幼馴染…安倉美奈。今日は、食事に誘われてきたわ…」

―由比に比べると、少し背丈が高い女性。

「…俺も、竜平の高校時代からの親友だよ…名前は、飯原慶介。俺も竜平と同じサークルに入ってるぜ。」

「ちよつと待つてください…すると、入ってないのは…」

新一は、美奈の方向を向いた。

「―私だけよ。今日はサークルメンバーで集まったわけじゃなくて、たまたま日程が空いてたから遊びに来たの……でもっ…こんな事になるなんて…」

―少し、美奈の目が潤んでいる。

「それにしても…結構空いてる店内ね。あなた達6人……この人を含めても、7人しかいないわけでしょ？」

「そうね…確かに。」

「空いてるわよね…あれ、でも何かあったかな…」

蘭と、園子も口々に言う。

「いや、それは―」

だが、新一の言葉を遮って由比は言った。

「―明日、男子のスポーツ部が、大学と高校で交流試合をするから…朝凄く早いから、もう皆寝ようとしてるんじゃないかしら……ちなみに女子は来週で、慶介君は明日サボる気なの……竜平君も、そうだったわ。」

ポリポリと、慶介は頭を掻いている。  
蘭と園子も、ようやく思い出した。

―そして、由比は…新一に尋ねた。  
「それより…あの、工藤新一さん？」  
「え？」

―静かに、彼女が笑った。  
「…もう、犯人は決まっていると思いますが？」  
「え？」

すると―由比は、椅子に置かれている志保のバッグを指差した。

「―その中でしょうか？凶器は。」

容疑者・宮野志保（事件編3）

「ほら… バッグの外に出ている、刃先… あれじゃないんですか？」

― 蘭と園子が鋭く睨みつけると、にこつと笑って彼女はこう言った。

志保は、椅子の上のバッグを取り上げた。

― だが、本当に入ってる。

「嘘っ…」

蘭が小さく叫ぶと同時に、新一は志保に向かって歩き出した。

― 視線が、余りにも鋭い。

「見せて頂けますか？」

「…ええ。」

新一は、丁寧にナイフを取り出した。

「……この事ですよ？由比さん？」

刃先には血痕が残っている。

「はい……」

すると、新一は何かを呟いて、それを目暮に渡した。

「――鑑識に回して下さい。彼の血が、まずは確認しましょう。それに、指紋も付いてるかもしれませんね……」

「ああ、そうだな……」

そして、新一は続けた。

「それと……」

―今度は鋭く由比を睨む。

「由比さん……」

「えっ……」

「―どうして、あのバッグに凶器が入っていると分かったんです？」

「そんな……ただ、刃先が見えて―」

由比が慌てたように答えると、新一はすつと笑顔を作った。

―但し、それは犯人を追い詰める時の笑顔。

「―その通り。私も確認しましたが……僅かに見えてましたね。では……質問を変えましょうか。『そんな物にどうして目をつけたんですか？』」

「っ……」

「不自然すぎませんか……目が良いのかもしれませんが、流石に分からないでしょう……そこを凝視していない限り。でも、バッグを凝視する……これも不自然です……もっとも、最初から『そこにあった事を知っていた』というならば話は別ですがね……」

「……生憎、あなたと同類なものでね……」  
沈黙を破ったのは、由比本人だった。

「新一と…同類？」

由比は、軽く笑顔を作って、聞いてきた蘭に答えた。

「そうよ…私も、彼と…同じ、探偵なのよ。もっとも、下手の横好き…大した推理力も無いんだけどね。」

そして、新一の方を向いた。

「ちよつと本能的に凶器を捜しちゃって…ごめんなさいね。変な事言つて…」

「いえいえ…一応、納得しました。」

―勿論、新一はその程度の説明で納得などしていないし、納得していない事は由比にも分かった。

「しかし…工藤君。」

「ええ…犯人は、間違はなく内部犯と見ていいでしょう…外部から入るには、このドアしかありませんし…入ろうとすれば、ベルが鳴ります。それに、外部から入ってきて、奥の方の志保の席のバッグに入れる余裕があるなら…さっさと脱出するか、ここに置いていく方が賢明…そう、つまり―」

—この中に、必ず居るんですよ……犯人が。

外は、静かに雨が降り出している。

容疑者・宮野志保（事件編4）

「―指紋が出ない!？」

警部の大声に、証拠品と容疑者の荷物の取調べをしていた俺は思わず振り返った。

「…何処にも無いんです…指紋が…血痕は、本人の物と一致しています。」

「そう、か…」

―厄介な事になった。

そう思いながら、もう一度取調べに戻る。

遺体の様子からして、まず刺殺なのは間違いない。  
ただ…

『そつえば…あの時、銃声に似た…何かが破裂する音が聞こえて、  
途端にキツチンが燃え上がったんだけど…』  
―破裂する音？

…恐らく、これがキーになるはず……

そして、この破裂で…多分、キッチンで炎上が起こったんだろう…

でも、それが…何なんだ？

「ねえねえ…蘭？」

「え？」

「あの男の人…死ぬ時に、何か叫んだ？」

「あれっ…」

…？

「普通、殺されようとしたら…抵抗して、声とか出すんじゃないかな…と思っで。」

「そう…だよな。」

そういえば…くそっ…何でそんな事に気付かなかった…

「—薬品じゃないかしら…眠らせれば、声も上げないと思うけど…」

—今の、由比さんの言った可能性が一つ。

他にも…喉に強度の炎症を起こす薬品とか…

「どうだね？工藤君…何か分かったかね？」

…っと、もう結構時間経ってんな…

でも…ダメだ。

「まあ…ある程度、トリックも組み立てられてはいるんですが…  
…もう一つ、確証になる物が欲しいんですよ…」  
いつもなら…これがすいすい出て来る…くそっ…

『志保』

…意識するな。あいつも…容疑者の一人だが…

感情は禁物…冷静になれ……工藤新一…！

キーワードは…

『パンッ』

…そう、あの音……あの音が、何だったのか…

パンツ

「きゃあっ！」

えっ…

「大丈夫！？園子…」

「う、うん…」

おいおい……マジか！？

「……それより、今の…」

「何なんだろう……破裂した物も、何処にも無いわよ？」

……え……

まさか…

「でも、さっきの『パンツ』って音…これだったんだね——新一？…  
新一？」

—そうか！

……そうか、そういう事か！

そうすれば……全部解ける！

何もかも……問題が……解ける！

だとすれば……犯人は……！

容疑者・宮野志保（解決編）

「成る程…」

― ゆっくりとした口調で、新一は告げた。

「新一… 分かったの!？」

「ああ… 大方な… …」

― だが、蘭の方は向かず、僅かに新一は志保を睨む。

そして、静かに― 全てを告げるべく、話し始めた。

「一つ一つ整理して行きましょう… まず、この男を刺殺したナイフは、間違いなく志保のバッグに入ってたナイフ… …」

全員が、黙って新一の推理を聞き込む。

「― さてと… 目暮警部。」

「ん？」

「どうして、この男は… 殺される時に、声を上げなかったんでしょ  
うか？」

「それは……」

少し、目暮は考え込む。

「……何か、薬品を嗅がされた……」

「―そう考えるのが妥当でしょうね……ですが、鑑識さん？その類の薬品の反応はありました？」

「いいえ……特には……」

「……さて、これが一つ目の問題です。けれど、この問題が解けた途端―後は他愛も無いトリックで、全てが解けてしまふんですよ……  
…そして、これが出来るのは―」

―冷酷な目で、新一は志保の方を睨みつけた。

「え……」

「う、嘘……嘘でしょ!？」

蘭と園子が、口々に言う。

うろたえるように、目暮が聞く。

「……それじゃあー工藤君……」

「ええ……考えられないんですよ。彼女にしか……」

張り詰めた空気。

「嘘……でしょ！？新一！」

「……」

「まさか……宮野さんがそんな事するはずないじゃない!!」

「あんだ、それ本気で言ってるの!?!」

「嘘って言ってよ!!」

悲痛な少女達の叫び声。

「――これが真実だ。蘭、園子……犯人は――」

犯人を名指しする時の鋭い眼光。

「……志保。お前だ。」

ゴトンと音を立てて、志保の手元にあったグラスが落ちる。

「……………嘘……………」

——志保が浮かべる表情は、非常に哀しくて。

「……………ええ……………そう、よ……………」

——凄く、哀しい声をまた、志保も上げた。

「——ちょっと待ってよ！新——！」

蘭は、新一の襟元に掴みかかる。

「凶器が見つかっただけでしょ！？何で…そんなの、誰かが入れただけかもしれないじゃな—」

「—違えんだよ…他に、見つかったんだよ。証拠がな。」

『証拠…？まさか…』

「そう、この音の正体は…」

『やばい……この探偵は勘違いしてるけど、このままだと—警察に気付かれる！それに…もう一度調査されたら……急いで、どこかに隠さないと—』

「何してるのかしら…」

『はっ!!!』

細い女性の腕が、右ポケットへと突っ込まれた美奈の腕を掴んでいた。

―志保だ。

「安倉さん……やっぱり、あなただったんですね。」

―新一の静かな笑みは、美奈へと向けられていた。

「助かりましたよ…小さすぎるから、警察が取り調べても…思うように行かないと思ったんでね。もし、そんな事をここで堂々と僕が言い上げれば…焦って隠すに決まってる。そう、まだ間に合うと思

ってね。」

「そんな…何を、言ってるの？」

完全に、美奈は冷静さを失っていた。

「しらはつくれても無駄よ……」

志保は、強く美奈の腕に力を入れる。

「きゃっ…」

—そして、志保はポケットの中の中身を、全て取り出した。

それを、目暮が覗き込む。

「…何だ？この小さな玉は…BB弾のような…」

「小型音爆発装置ですよ…」

「音爆発!？」

新一は、一つそれを掴んで言った。

「—この男が、死ぬ時に声を上げなかったのは…薬品でも何でもありません。気絶していたから。そう…この音爆発を、耳元で起こされたんですよ…こういう風に。」

すると、新一は周りから少し離れて、耳を塞ぎ、自分からも少し離してその玉を潰した。

パン…

「凄い…音量だな。」

「ええ…まあ、離していれば耐えられない音量ではありませんね…少し、意識が飛びますが…」

「大丈夫？」

志保が、思わず倒れこみそうになる新一を、支えた。

「ああ…サンキュー。志保………」

そして、再び美奈に歩み寄る。

「これを使って…男の耳元で爆発させれば……まず、意識は保てないでしょう。不意打ちであれば尚更…そして、後は男を床に寝かせ

て…殺害した。」

だが、ここで由比が反抗する。

「ちょっと待って…可笑しくない？そうすれば、確かに返り血を浴びないように切る事は可能かもしれないけど…でも、指紋は付いてなかったんでしょう？」

「あ、ああ…そうだが。」

さらに、強く由比は言った。

「これじゃ証拠不十分よ…残念だけど、その推理は—」

「—お手拭…」

—気付かれた事を、とうとう由比も悟った。

「柄をそれで包み、刺す…それで、簡単に成立しますよ…お手拭

ならば、別に怪しませんし……」

そして、新一は――語気を荒げた。

「後は、志保のバッグに……気付かれないように突っ込めばいい。皆、火の方に意識が行ってたから……気付かなかったんだろうな。」

――志保が侮辱されたのに、強く腹を立てた。

「……弟。」

美奈は一言、静かに呟いた。

「私、弟が居るんです……年はかなり離れてるけど、とても元気な子で……両親がもう亡くなってる私にとっては、本当に心の支えでした……」

一呼吸置いて、また続ける。

「私は、竜平の……恋人だったんです。」

「え？」

「……ある日、ドライブに連れて行って貰いました。最初は私と、彼と、弟で乗り……途中のピアノ教室で弟を降ろして、私と彼で二人っきりで一日を過ごす……そのつもりでした。」

唇を、強く噛み締めた。

―その部分から、血が流れ出す。

「なのに……なのにっ……！」

~~~~~

『うわぁ……凄い！大きいビルだぁ！』

『「ここら、はしゃぐと危ないわよ……」』

『「そっだぞ……ちゃんとシートベルトっ！」』

~~~~~

「彼が気付いた時には…目の前に、トラックの荷台が…迫ってました……」

美奈は、泣き崩れた。

「私と、彼は…たまたま、軽傷で済んだけど……弟は、もう……永遠に、意識不明の…重体で……戻ってこないって……そうしたら、許せなくて……」

「それで殺人を計画した……」

そして、いきなり立ち上がった。

「—そうよっ！これが…これが正しかったのよ！私が正しいの！！荷台に突っ込んだ時に…ハンドル離して、助かろうとして後ろに飛び込んだ馬鹿と違ってね！」

パシッ

「  
…え…」

強く、志保が美奈の頬を打った。

「  
…あなた、何様のつもりなの？」  
「  
…え…」

冷静に、鋭く突き刺さる――言葉。

「『自分が助かる為に後ろに飛び込んで来た？』……あなた、思い込みもいい所だわ……」  
「  
…だって――」

「――あなた、どうして軽傷で済んだの？」  
「それ、は……」

「  
…守ってくれたからでしょ。」  
――美奈の涙が止まった。

「  
…あつ……」

「―その弟も…普通なら、死んでたのよ?…それを、彼が…守ってくれた。そうでしょう?」

もう一度、美奈は泣き崩れた。

ブルブル…

「あれっ…電話。」

由比が反応して、美奈のバッグから携帯を取り出した。

「美奈、電話だよ。」

「う、うん…ありがとう…」

ピッ  
…

「はい、もしもし…」

『美奈さんですか？』

「え、ええ…」

『—弟さんが、目を覚ま—』

ピッ  
…

「うわああああああつ！」

泣き声にもならない悲鳴を…その女性は、上げ続ける。

奇跡は―必ず、幸せを呼ぶとは限らない。

…もっと早く起こっていれば、幸せをもたらした物……それが、奇跡だったはずだ。

―この奇跡は、彼女を…変える事が出来るだろうか？

出来なければ……ただ、彼女をどん底へと突き落とす……悪魔の悪戯に  
しか過ぎない。

~~~~~

「……さてと……話は、署の方で聞こうか……勿論、由比さんも、慶
介さんもな。」

「え？僕もですか？」

志保が、慶介を小突いた。

「当たり前でしょう……新一の言った通り、あなたも耳を塞いでなけ
れば、あの音で気絶するのは避けられなかったはずよ……最初から

「知っていて、止められなかった罪は重いわ……勿論、由比さんもね。」

―そう言つて、志保は由比の方を振り向く。

「…聞ってるの？」

由比は、神妙な表情を見せていた。

「ねえ…探偵君？」
「え？」

「どうして…彼女を信じられたの…？」

由比は、ずっと新一の方を向いた。

「…あんな博打に出て…普通の女性なら、気が動転して、美奈の困惑にも気付かないと思うんだけど…」

「信頼…してたからですよ。」

「え…」

「―志保の事を、この世で…一番信頼してるから。そう……志保なら、必ず…理解してくれると、思ったから。」

「ちよ、ちよっと…」

―真っ赤になっている志保。

悪戯っぽく笑う蘭と園子。

ぽかんとしている、目暮と佐藤。

「……ふふっ……大切にしないね。」

由比は、ひらひらと手を振ると、目暮と共に歩き出した。

「……探偵君。」

~~~~~

「ふう……」

普通に、日付が変わっている。  
散々事情聴取に付き合わされて……はあ。

思わず、私はソファにへたり込んでいた。

「本当、あなたどうして疲れないのか不思議だわ……」  
「慣れだよ。慣れ。」

「……でも……」

「……心配すんなよ。」  
「えっ……きゃっ——」

「ちょっと…いきなり、抱いたり…」

「今、不安そうな顔…してたろ？」

「…してないわよ。別に…」

……

「—守るから。」

「………」

「共同体として—信頼してっから。」

「…キザな台詞がそんなに好きなのね。本当に…」

「じゃあ…三つ言わせて貰うわ。」  
「え？」

「一つ目…キザな台詞は、人前では吐かない事。」  
「う…」

—彼の顔が、面白く変化する。

「二つ目…もう少し、抱いてて。」  
「…へえへえ。」

……ふふっ……

「三つ目。」

「え？……うわっ——」

はい、レースンの時のお返しも兼ねて……

「……やりやがったな。」

「……満更でもないんでしょう？」

—可笑しくなって、笑った。

## 新一の誤算

（参った…なあ。）

本当に面倒な事になった。

…勿論、俺のせいなのだが。

原因は、約3時間前に遡る。

~~~~~

「……」

『フン…哀れみか。そんな事をする為に来たのなら…さっさと帰るんだな。』

「…本当なのか？それは…」

信じられなかった。

—こいつの過去。

今でも、捕まった黒の組織のメンバーと、面会して接触する事がある。

殆どが死刑なのだが、数年たった今、まだ処刑されていない奴が多い。

それは、この組織の存在が、まだ完全には分かりきっていないからである。

まだ残党がいるかもしれない…と考えれば、処刑も慎重になる。

『むしろ嘘をつく必要があるのか？……』

―そして、こいつは…

「何で…」

『―警察に言わなかったかだと？言った直後に、そいつを見捨てて…その結果、殺された……そんな失態をやらかした警察に、言うわけ無いだろうが。』

「……」

…大体の組織のメンバーが、家族を失った者。

―しかも、それは…警察に責任があるとされる事件ばかり。

組織のボスは、家族全員を―警察に撃たれて、殺されている。

犯人と勘違いされて…撃ち殺されていた。

そして、ジンは―『殺し屋に狙われている』と警察に言ったのだが、警察には無視され…直後、その交番の目の前で―撃ち殺されたというケースだった。

「……そうか。悪かったな…いきなりこんな話をさせて…」
『フン…分かったら、さっさと帰るんだな。』

新一は、立ち上がった。

「ああ、そうさせてもらう……」

小部屋から、出ようとした——その時。

『……どうでもいいが。』

「え？」

『……シェリーに言っておけ。お前もさっさと死んだ方が……いいとな。』

「ふざけんな……お前なんざに何が分かる？……絶対言わねえよ。笑顔を手にしたあいつに……そんな事はな。」

——結局、変わってはいない……そう思いながら、新一はドアを閉めた。

『……分かっていないな、名探偵……』

小さく、呟いた言葉が……部屋に残された。

~~~~~

だが、勿論ながら…面会に行く時は、志保には「事件だ」と言っ  
嘘をついて行く事になっている。  
出来る限り…それを、志保に思い出させたくないから。

…組織のメンバーによつては、組織を抜け出した志保を極端に嫌う  
者…恨む者も沢山居た。

だから、言つてなかった…が、今日……このままじゃばれちまう。

~~~~~

『あなた…事件じゃないわね?』

「え、え?どうして…」

『さつき目暮警部が来て…「事件だ」って説明したら、「そんな大
きな事件は無い」…って返してきたから…」

「あ、あはは…」

『…さてと、何してたのか…帰って来たら、きっちり絞らせてもら

うから…ま、帰ってこないってなら話は別だけど…』
~~~~~

…あっちは浮気だとも思ってるんだろうか。

でも、半端な嘘は…アイツには通用しないだろう。

(どうする…?)

—話したくない事を…話さなければならぬという状況。

(……どうしようもねえよなあ……)  
一人、ベンチに座りこけていた。

「あれ…新一お兄さん？」

…ん？

何か聞いた事あるよな…

「新一さんですよー!」

「あの兄ちゃんだ！」

あつ…

「お前ら…」

「どうしたの？こんな所で……何かあったの？」

ははっ…見抜かれてるよな。そりゃ…

「ああ…ちよつと、な。」

「…歩美分かった。」  
へ？

「…志保お姉さんの事で、何かあったでしょ？」  
えっ…！！

…な、何で分かった！？

「分かりますよ！顔に書いてありますもん！」  
「そうだぞ！」

…そっか。『コナン』の事を知ってるんだもん……俺の顔だけで、心配なのかどうかぐらい…分かつちまう、てか？

「…喧嘩しちゃったの？」  
「いや…別に、喧嘩じゃねえんだけど…」

…そんな心配そうな目で見ないでくれって…

「……………ねえ。」

「え？」

「ちゃんと、言わなきゃダメだよ。言いたい事があったら……」

「哀ちゃんの事、歩美……分かってるつもりだけど、ちゃんと言わないと……本当に、分かってももらえないよ？」

……なんだろ。俺。

いや……こいつらが凄いのか。

「……そうだな。ごめんな。皆……じゃー！」

…言おう。

アイツが…どう思つか分からないけど、絶対に言おう。

…例えアイツが哀しんだとしても、隠してる方が…哀しむんだから。

~~~~~

ガチャ

「ただい…ま…」

—かなり遅くなっちまった。

「志保？」

…返事が無い。

もしかして、風呂か？

「…あら、お帰り。」

あつ…

「…あのさ、志」

「はいはい………面会、お疲れ様。」

…へ？

「え……」

「ジンと面会でしょ？…気が狂っちゃわないようにね。あれの戯言に耳を傾けて…」

…えっ！？えっ！？

「ど、どうして…」

「バレバレなのよ…あなたも私と、結構似てるから…」

に、似てる？

…なんか訳わかんねえぞ。

「…大事な事になると、一人で抱え込もうとする所。まあ、私ほどじゃないけど…あなたも、結構な症例よ。」

「………」

…でも…

「—あんまり、心配しないで？もうあの組織が…私達を殺しに来る事は無い。もう…考える必要なんて、無いんだから…」

「…お前。」

「お願いだから。」

―静かに、志保が俺を抱く。

「…ああ。悪い。」

…ちょっと苦いけど、かなり甘い―そんな時間。

「…好き。」

口付けを交わす直前に―ふと思った。

「…そういえば。」

「え？」

「そうだ…」

「どうして、ジンと面会してるって分かったんだ？個人名までは流石に…」

「…ああ。それ…はい。」

「…えっ！」

「な—」

今朝置いてきた手帳！

成る程…この中見て、何するか分かったんだな！？

「…おい、おい…」

しかも……やべえ！

あの紙が…挟まって……ない…？

「お前…！」

「勿論…ちゃんと、蘭さんの元に送つといてあげたわよ…」

寝惚けて書いた…あれをか！？

『明日、午後6時―あなたの元へ、驚くような化物をお届けします
配達キット』

こんなメール…送ったら、蘭がビビるだろうとか考えてた奴！？

「あなたが…本気で、蘭さんを脅かすつもりだ…ってね。」

ガチャン

「新一…居るわよね？」

「ええ、ここに…」

ははっ…はははっ…

「濃密な時間を過ごしているみたいで何よりだわ…ところで、こんな紙が届いたみたいなんだけど…私へのサプライズかしら？幽霊送るみたいだけど…流石ね。新一は…志保さんをこき使って、そんな物を作ったんだ…」

「な、わけねえ…ってか、志保！フォローしろよ！！」

「…ふああ…私、眠くなつたから…お休み。」
「にゃろ…」

「新一い！！！！覚悟なさい！！！！」

志保の方を向いて、背後を取られた俺は―結局、この晩眠る事は出来なかった。

…正直、一度死んだのかもしれない。

彼の膝元で（前書き）

新一君の家…もしかして、自家発電！？

…知らないけど、不確定要素が多いのでこんな話がかけてしまう）
笑）

彼の膝元で

「ちょっと…どうするのよ!？」

「知らねえよ…懐中電灯も無いんだし…」

― 久々にちょっと騒がしい、晩がやって来た。

突然の停電で、すぐにブレーカーを見に行こうとしたら…

― そしたら、工藤君。

「ブレーカー…？ そういや…何処だったけ…」

… だって。

「いや…さ。停電になんかった事、この辺全然無くて…」
「…知らないってわけね。」

… でも。

「… ねえ、まさかこのまま…」

「― ま、いいんじゃないか？― 晩明かしても…」

—冗談じゃない！

「ふざけないで！さつさと探しなさいよ…何処にあるの！？」

「んな事言われたって！配電盤がどこにあるはず…って事しか知らねえんだよ！」

…もう、この推理フェチ…こういう時に役立たないのね。

どうしようかしら…全く。

取り敢えず、寝る用意は済んでるし…

「もういいわ…私、寝るから。」

「あ、おい！」

まったく…本当に、あなたのせいよ？

普通、自分の家のブレーカーの場所、忘れる？

「お休み…」

—私は、ゆっくりと階段を上がった。

「さてと…」

真っ暗だと、何処に何があるか…まあ、ドアとかに頭ぶつけないで問題ないけど…

「ふう…」

—布団の中へと、潜り込む。

けれど、結局窓からは…星は見えない。

停電は家だけみたいだから…やっぱり、ブレーカーが落ちたのね。

…ま、星なんてそんなロマンチックな物…見る気にもならないけど。

さてと、明日も早いし…もう寝ようかしらね。

どうせ工藤君はあたふたしてるんでしょうけど……ふぁ……


~~~~~

―寝れない。

何も聞こえてこないのに…眠れない。  
どうして？

…それに、喉も渴いたし…水飲みに行こうかしら…っと。

トン、トン…

…なんか不気味ね。真っ暗闇で下る、階段の音も。流石に工藤君も…ソファで寝てるでしょうし。

…はあ、それにしても…こんなに喉が―

っ!!

「きちゃっ!」

滑っ―

『ドオン…』

…あれ…

「まったく…暗い中、無理して階段下りようとするから…」

…痛く、ない…？

「あっ…」

「ん？どうした？」

—抱えられてた。彼に。

「……どうしたんだよ？宮野……」

…っ …… ふふっ …… 情けないわね。 途端に眠くなってきた…

「…悪いわね。」  
「え？」

そう…彼の膝元が、一番…眠れる。

「お休み…新一。」  
「え…え？」

ずっと起きていた彼の中で、私は――静かに眠りへと堕ちた。

――翌朝、そのまま彼に運ばれて、ソファの上で抱かれて眠っていた事に気付くまで。

## 雨の騒動

いよいよ土砂降りになってきた。

予報では一応、からつとした晴天が一日中続く…  
現に、スーパーに入った4時までは見事な快晴。

まあ、それにしてもよくもこの時間になって降ってくれるわよね…  
少し降ってるから、待とうと思ったら本降りになって…  
もう少し待てば弱まると思えば、さらに強くなって…

―不覚にも、よく西の方向を見たら厚い雲。

―1時間で買い物して、そしてしばらく待って…今、6時。

…私は、スーパーの入り口にある小さな屋根の下。

中に戻ってようか？

―でも、傘は確か売ってなかった気がする。

…帰ろうにも、どうしようもない。

携帯で新一を呼ぼうかしら？

…でも、新一は―

「あれ？哀ちゃん？」

あら…

「吉田さん…お使い？」

「うん！…哀ちゃん、傘無いの？」

違和感あるのよねえ…やっぱり。

吉田さんが私が戻っても、いつまで経っても変えないから、一度言ってみた。

『どうしてずっと哀ちゃんと呼ぶの？』って。

『―じゃあ、志保お姉さんだったら「吉田さん」じゃなくて「歩美ちゃん」だよな？』

…言葉も出ない。

―意地悪。私が人の事、名前で呼ばないの逆手に取って…

たつた一人を除いて

そこまで考えてるんでしょうね。吉田さんは。

でも、どうせ「歩美ちゃん」って言っても、「哀ちゃん」って返すでしょうけど…

「哀ちゃん？」

「えっ！」

つと…

「そっかー…新一お兄さんの事、考えてたんだね！」

「え…」

— 吉田さんは、にこつと笑って傘を差して、一人で歩き出した。

「新一お兄さん待ってるんでしょう？」

「え…ちがー」

「バレバレだよ、哀ちゃん…じゃあ、まったねー！」

………

はあ…

…居るわけ無いじゃない…彼が。

昨日は徹夜で目暮警部と事件に立ち会ってたんだから…まだ寝てるに決まってるわ。

そもそも、わざわざ彼がこのスーパーまで来る事なんてないし…ねえ。

…どうしようかしら…この雨、止むんだったらいいけど…  
夕食…かなり遅くなりそうっわ…最悪だな。大雨じゃねえか…入ってきた時は晴れてたのに…」

…へ？

「ったく…傘持ってきてるわけね…え…？」

…し、新一！？

「ど、どうしたのよ…ずっと寝てたじゃない。」

「オメーこそ…まだ帰ってなかったのかよ？」

…って、事は…

「…傘、持ってないのよね？」

「あ、ああ…そうだけど？」

「はあ…」

「仕方ないわね…取り敢えず博士呼んで」  
「なあ、志保。」

「……？」

「50m」  
「え？」

まさか…

「行くぞ！」

きゃっ…っ！

はあ、はあ…

「何よ…わざわざ、濡れに来たの？」

それに、ここから、どう動くのよ…どこにも道がないような、この場所から…

「―その木の横…」

「え？」

「その小道。通り抜ければ、多分喫茶店に通り抜けられるぜ。」

…まさか。それに…

「また、濡れなきゃいけないの？」

「いや、小道つつても本当に短けえよ。5mあるか、ないか。さっさと行こうぜ…まだ雨、強まるだろうしな。」

…全く。面倒ね…

「夕食は…」

「—ま、なしだな。別に作ってもいいけど…」

「…たく…あら？」

「え…！」

「—無い！」

「明日の朝用の…！」

「ふと袋の中見たら…なくなってる！」

「ま、さ、か…」

「—まだまだ甘いな。ワトソ…」  
「…新一…」

「あれ、志保ちゃん…どうしたの？」

「蘭さん…ちよつと、待っててね…新…処、罰…」

「わ、悪かつ…」

待ちなさいっ!!

「取り敢えず、後程博士に喫茶店まで迎えに来てもらって、その晩はじっくりと新一の「レーズン克服講座」が行われた。」

けれど、翌朝、その場面を目撃していた蘭さんに、今度は私がこつてり絞られ、散々に笑われたのは、言うまでも無い。

雨の騒動（後書き）

誰かアイデア下さい（笑）

一度だけ（前書き）

タイトルは…哀ちゃんの行動から、どうか推測を…w

## 一度だけ

「あら、そこに居たのね。」

草原で寝転がって、意識が薄れ掛けていたコナンに灰原が話しかける。

―夜空に散り散りに星が広がり、もう12時は過ぎただろうか。博士のいびきが微かに届く。

「ああ。眠れねえもんで…ま、ここで寝たら風邪ひくか。」  
とあるキャンプの夜。

ふと、灰原は意地悪そうに近付いて聞いた。

「ねえ、工藤君。」

寝転がったままのコナンの真横に、灰原は座り込む。

「―私、何歳だと思う？」

「へ？」

静かに笑みを浮かべたまま、灰原はもう一度告げた。

「私が何歳だと思うか、って聞いたの。あなた私の元の体、二回見たでしょ？幾つに見えた？」

——一回目は、組織との接触時。あの時は緊急時で慌てていた。

だが、二回目も組織との接触時ではあるが、少し時間があつたので、ある程度イメージを描く事はコナンにも容易であつた。

「どう？」

「…84つて言ったら殴る？」

「ええ。勿論。」『ゴンッ』

にこつと笑ってコナンの頭に一撃を喰らわせた。

「痛つてえ…」

「真剣に考えなさいよ。真剣に…」

コナンはふと夜空を見つめる灰原の横顔を覗き込む。

(…宮野志保、か。)

「ま、博士と違って私をよく見てたとはとても思えないから、思い出せないのも無理ないけどね。」

少し肩を竦め、「少し悔しいんだけど」と言うと、寝転がりながらコナンは首を傾げた。

(……いっくつかねえ…)

コナンなりに少し頭の中で論理を組み立ててみる。

「？姉の年齢から推測する」

(灰原の姉さんは大学通ってたらしいし、20ちょっと…そうするとそんな年の差が離れてるように見えない灰原は20手前か、丁度20…そんなぐらいかねえ…)

「？灰原を信じてみる」

(『あなたとお似合いの18歳よ?』…ってか。まあ嘘ついてないかもしれないけど…)

「？アメリカに行った頃との時間関係を考慮」

(大学に…飛び級で入ったんだろうな。12、3をイメージして…帰国してから、15ぐらいから働かされたとすれば…うーん、やっぱり18、19ってところか?)

「ーぐらいしか思い浮かばなかったでしょ？」  
コナンから「18」という解答が得られると、灰原はすぐにつき返す。

「わ、悪かったな…変な推理で。」

灰原は軽く笑うと、コナンをゆっくり起き上がらせる。

「……嬉しいわ。むしろ。」

「え？」

「ー誰も18なんて言うてくれなかったわ。アメリカに居た頃から馬鹿にされ続けて、まだ中学生ぐらいなのに……『性根ごと腐りきった女』だとか、『小さすぎる成人女性』とか……なんでそんな事言われるのか、ってくらいね。人種差別なんて、そんなものなのか、それとも単純に私の陰湿な性格が嫌われたのか、私には良く分からないけど。」

「……」

「ま、慣ればきつくもないけど……って、貴方の前では禁句ね……普通に辛かったわ。」

そして、灰原は自分から、少しコナンに近付く。

「ちよつと良いかしら？」

「あ、ああ……」

「  
!  
?」

「ありがとう。」

思わず、コナンは赤面する。

―逆に灰原の表情には、僅かな満足感さえ漂っていた。

「何やってるんですかぁ!？」

「「え」」

「あ、哀ちゃん!？」

「お前ら、キスしてただろぉ!？」

「灰原さん、嘘でしょう!？」

―背後から、三連続の大声が響き渡る。

すると、灰原はすぐに表情をいつもの表情に戻し、さっに対応する。  
「う、嘘よ。こんな蘭さんフェチにキスなんかするわけないでしょう。さ、さ…寝ましょ寝ましょ。」

「な、何がフエ…がつ！」

「ほら、江戸川君。さっさと寝るわよ。ほら…早く。」

灰原がコナンを引き摺るようにして、テントへと戻る様子を、3人はぼけっとしながら見つめた。

「…アダルトですね。」

最後の光彦の呟きに、残る二人も頷いたのである。

一度だけ（後書き）

11 / 8

なんという事でしょう。今気付いたら初回とタイトルが同じでした。  
まあいいかというお気楽思想のmineです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9819r/>

---

SS集

2011年11月13日04時00分発行